

「今、私の晴雨計は！」 (64)

「女の一生、男の一生」

平山征夫

「女の一生」と言えば、殆どの人がモーパッサンの小説か、杉村春子が演じた森本薫の戯曲を思い浮かべるだろう。

モーパッサンの「女の一生」は一八九三年の小説。原題は「ユン・ヴィー||人生」だが、英語訳された時「女の一生」となり、それを邦訳したためこのタイトルになったようだ。何不自由なく育った貴族の娘ジャンヌが、憧れを持って美青年のジュリアンと結婚するが、その夫の浮気に裏切られ、頼った母親にも過去に不義があったことを知り、一人息子を溺愛

する。しかし育った息子はジャンヌのもとを去り、金を無心するようになり、拳句は女との間に生まれた子供を押し付けてくるが、最後は息子も戻ってくる、という話だ。今も変わらぬ女性の苦勞ネタ勢揃いの感じだが、それでも最後のセリフは「人生も捨てたものじゃない」というのだから女性は強い。日本では一九二八年栗島すみ子主演で繰り返し映画化されてきた。

森本薫の「女の一生」は、太平洋戦争末期、東京空襲を避けながら一九四五年四月に杉村春子主演で上演されたのが始まり。森本が恋人であった杉村のためその人生を踏まえて書いたもの。戦争孤児となった「布引けい」は、不

思議な縁で拾われた堤家で女中として働く。清国との貿易で一家を為した同家は、当主亡き後稼業を引き継いだ「しず」が女当主として時代の荒波を生きていたが「けい」の闊達な気性を見込んで長男伸太郎と結婚させ稼業を継がせる。実は「けい」は二男栄二に想いを寄せていたのだが、その気持ちを断ち切り、世話になった堤家の嫁となり、学者肌で商売に向かない夫に代わって稼業に励む。だが、かえって二人の距離は離れついには夫も娘も去っていつてしまう。やがて戦争の時代になり、東京空襲で堤家も「けい」も全てを失う。その焼跡に立つ「けい」のもとに戦地から栄二が帰ってくる……。

日露戦争の戦勝に沸き立つところから始まり、太平洋戦争敗戦で全てを失ったところで芝居は終わる。日本と同じ激動の半世紀を生きた女のドラマだ。この芝居にも有名な台詞がある。「けい」が自分の人生を振り返りながら語るシーンだ。「誰が選んだものでもない、自分で歩き出した道ですもの。間違いと知ったら自分間違いでないようにしなくっちゃ」。森本は戯曲を書きあげてもなく34歳の若さで病死したが、この芝居は杉村によって九四七回演じられた。早逝した恋人が残した戯曲を必死に守り通したのだろう。その後を継いだ平淑恵によっても二六九回上演され、現在は三代目の山本郁子の布引けい

で続いている。山本は新潟出身だが、学生時代杉村の女の一生を見て、立ち上がれないほど感動し、

「私の人生の先生は杉村さんだ」と思い、文学座を志望したと語っている。この芝居を作り上げてきたのが演出の戌井市郎だ。久保田万太郎から早くに引き継いで、森本亡き後杉村とこの芝居を仕上げてきたが、その演出も数年前三代目の鶴山仁に代わった。敗戦直前から74年演じ続けられてきたこの芝居の背後に多くの人々の人生があった。

このほかにも「女の一生」はある。古くは山本有三が朝日新聞に連載（一九三二年10月から翌年6月）した小説。物語は大正二年主人公が東京の女学校に入って

上京したところから始まり、恋愛・結婚・出産等の人生の出来事が描かれている。遠藤周作にも同名の小説がある。しかも「一部キクの場合」と「二部サチ子の場合」

の二部構成だ。キクとサチ子の生きた時代は幕末から明治と太平洋戦時下と異なるが、舞台はいずれも長崎。キリシタン弾圧で流刑人になった若者にひたむきな想いを寄せるキク、特攻隊員として聖書の教えとの矛盾に悩みながら出撃する恋人との別れ、そして被曝した町で生きるサチ子、二人の女性の人生が長崎を舞台に描かれている。瀬戸内晴美には責任編集で「女の一生」人物近代女性史」全8巻がある。本を見ていないので何とも言えないが、「恋と

芸術への情念」「自立した女の栄光」「火と燃えた女流文学」などの巻タイトルと並んで「明治に開花した才媛たち」「明治女性の知的情熱」などあるから、明治以降の女性人物史だろう。

瀬戸内氏に触れたのには訳がある。晴美、寂聴時代を通じて山の小説があるが、出家以降は元気で長生きされている人生経験を踏まえた説法が、多くの人に支持されている。人生相談の名手である。その瀬戸内さんを師と仰ぎ人生相談に励んできたという詩人伊藤比呂美さんにも「女の一生」という本がある。半年くらい前、朝のラジオ番組で、作家の高橋源一郎氏がこの本を紹介していた。

買って読み始めたところ、本学の

社会人向けの講座の「異文化塾アメリカ」の講師で来てくれた。伊藤さんは、私より一回り若いから60数年の人生だが、モーパッサンも真っ青の凄まじい人生を歩んでいる。大学卒業後、妻

ある男性と不倫、その後結婚するが一月で離婚、やがて再婚し二人の娘を出産、落ち着きかけたと思ったら35歳で良き理解者でもあった夫と二度目の離婚、気鬱と薬物依存でポロポロになるが28歳年上の英国人画家に惚れ、三人目の子供を産み、彼の住むカリフォルニアに渡る。その後両親と連れ合いの介護、看取りで日本とアメリカを行き来する生活を送っているうちに孤独になる。この間、こうした人生を詩人として赤

裸々に表現した詩集を出して注目され、荻原朔太郎賞などいくつもの賞を受賞。伊藤さんの「女の一生」は、ある一人の女性の人生を描いたものではない。10歳の子どもから80歳のおばあちゃんまで、あらゆる年齢の女性からの人生相談を並べたものだ。だから順番に読むと「女の一生」を知ることになる。そこには「なぜ親の言うことをきかないといけないんですか」（10歳）に始まり、「クラスにいじわるな子がいて、私を無視します」（13歳）、「夫が浮気をしているみたいです。嫉妬に悶えています」（27歳）、「つい叩いてしまいます。寝ている子を見ていて、ごめんね、と心の底から思うのに、また朝になると同じ事の

繰り返し」（31歳）、「別れなくてはならないのにずるずるひきずっています」（43歳）、「鏡を見ると老けてるのにゾットします」（56歳）、「ひどい母でした。それでも介護をしなくちゃいけないのか」（50歳）、「むなしくてたまりません」（52歳）、「この歳になつたらもうおしゃれもへつたくれもない」（77歳）、「認知症になるのではという恐怖が四六時中頭から離れません」（70歳）、「母を送りました。何故もっと親身の介護出来なかったらうと今になって後悔しています」（61歳）など女性の訴えが続く。こう見ると女性は一生悩みと向き合っているように見え、思わず「ご苦労さん」と言いたくなるが、逆の「男

の一生」はないだろうと思ってしまう。この本の中には少し男性からの相談もあるが、一般的に人生相談と占いは圧倒的に女性だ。何故だろう。問題解決脳の男は自分で解決してしまうが、共感脳の女性には共感を求めて投書するのだろうか。それにしても「ここまで人生経験を重ねてきて、大抵の人生相談に応じる自信がついた」と本人が語るように、その回答はユニークかつ目からうろこだ。ここでその回答を紹介するのは、ネタばらしなので控えるが、ひとつだけ「母親がジャーニーズにハマって、家じゅうがポスターだらけ」（23歳）の投書に対する回答を紹介しよう。「お母さんはハマりやすい性

格とお見受けします。以前にもいろんなものにハマってきたのではありませんか。多分俳優とか歌手とか若くていい男が多かったのではないですか。もしそうならば、お母さんの欲望処理能力は実に高い。パートナーに対する支配欲（満たされることはあまりない）、息子に対する支配欲（これも殆ど満たされない）をきっちり抑えて生きている。酒や薬物やギャンブルなどでなく実害のなさそうなものにハマるところにお母さんの地に足の着いた逞しさが見て取れます。ほっときましよう。実はわたしも一時若い時の岡田准一にハマって、仕事場など彼のポスターだらけになっていました・・・」。「説得力あるなあ」

と感心した。

わが身に照らして気になるものがあつた。それは「父が気難しくなつて困っています」(64歳)

との相談に対する回答。「これがパートナーならば、うっとうしいわね、と喧嘩を吹っかけてやるのが刺激にもなつて一番良いのだが、しかし父ならば放っておくしかない。そこが娘の限界と思いません。…中略…年取つた人たちの気難しさは、本態性です。思春期の人たちの爆発するような気難しさ、更年期の人たちのむやみと攻撃的になつてゐるような気難しさとは違います。ずっと男でやってきた人間が、ふと『自分が無力であることに、自分が社会や家族に何の意味も影響力も持つてない

ことに、気付いてしまった』ような気難しさです」。最近私自身が感じていたことへの答えを見た気がした。

念のため「男の一生」があるか調べてみたら、遠藤周作にあつた。秀吉に仕えた前野長康(将右衛門)の生涯を描いたものだ。秀吉が天下人に上り詰める戦において次々手柄をたて、11万石の名にまで出世したが、秀次付きの家老となり謀反の罪で秀次が自害を命じられた際、これを弁護するため連座、自害の悲運に散つた武士の生涯を描いたものだ。以前触れた「路傍の石」(山本有三)、「次郎物語」(下村胡人)、「あすなる物語」(井上靖)、「人生劇場」(尾崎士郎)、「青春の門」(五木寛

之)なども「男の一生」と言つてよい小説だろう」などと考へながら75歳までできた自分の人生を振り返つてみたが、「とても小説にはならないなあ」との想いを深くしただけだつた。

(令和元年10月29日)

